

向田邦子論

峰村裕子

はじめに

生活の中のちょっとしたものや事柄を楽しげに披露してくれる向田邦子のエッセイは、多くの人に親しまれている。死後十一年たっても未だにどこかの雑誌や何かの本の中にその名を幾度も見つける。

彼女の作品の底に流れるテーマの一つに「家庭」がある。「家庭」は人間が食事をし、会話をし、人間関係の基本的な事を学ぶ場所である。しかし、彼女は自分自身では結婚をして家庭をつくるという事はなかった。あくまでも彼女にとっての「家庭」は子供の頃の「家庭」であり、その頃のことを書いたということは、過去の思い出であり記憶である。

第一章では彼女の生いたちについて探り、第二章では第一節で「記憶」と「思い出」をキーワードに彼女の作品を掘り下げ、第二節では幼少時代の彼女を取り巻く世界の中

で、特に、その重要な位置を占めた父親像をとりあげ、彼女の魅力に迫りたい。

本論

第一章 生いたちと性格

まず、向田邦子の全貌を知るために彼女の生いたちから述べる。

向田邦子は昭和四年十一月二十八日、父・敏雄、母・せいの長女として東京府に生まれる。彼女が成人するまで、父親の転勤は六度を数え、彼女は四つの小学校と二つの女学校を渡り歩いた。たび重なる転勤は家族の絆をいきおい強くした。

昭和十一年、東京目黒区の油面小学校へ通うようになるが、その秋に肺門淋巴腺炎を患い、完治するまで約一年かかった。

娘・邦子の肺病再発を恐れた一家にとって昭和十四年一

月の鹿兒島転勤は幸運だった。

この頃読書に熱中するようになり、その対象となったのは、『明治大正文学全集』や『夏目漱石全集』だった。それは本の好きな父親の本箱から内緒で抜き出してきたものだった。その中で、「吾輩は猫である」について次のように書いている。

ほろ苦い味や皮肉。しゃれっけ。男というもの。そして小説。偉そうにいえば文学。

なんだかわからないけれど、大きくて深くて恐いもの……。これを教えてくれたのがこの本だったように思います。二十五年か三十年あとに、字を書いて身すぎ世すぎをするようになるとは夢にも思いませんでしたが、最近になってこの本は私の中の何かの尺度として生きていくという気がしてなりません。（「二冊の本」^註）

昭和十七年、高松高等女学校に入学したが父親は東京本社に転勤となり、二学期からは東京の目黒高等女学校に編入した。

昭和二十一年、父親は仙台へ転勤となるが、彼女は弟と二人で祖父母宅へ下宿し、昭和二十二年四月、実践女子専門学校国語科に入学する。二十五年三月に実践を卒業して

財政文化社社長秘書となる。

そこは社員十人ほどの小さな会社ではあったが、社長夫妻も彼女を可愛がってくれた。又、彼女にはつきあっていた男友達もあり、二つ三つの縁談もあった。しかし、彼女は毎日が楽しくなかった。

このままでは私の一生は不平不満の連続だろうな、と思いました。自分に何ほどの才能も魅力もないのに、もっともっと上を見て、感謝とか平安を知らないこの性格はまず結婚してもうまくゆかないだろうな、と思いました。

——これは本気で反省しなくてはならない。やり直すなら今、今晚この瞬間だ。（「手袋をさがす」^註）

しかし、彼女は結局のところ、このままの自分でいようと決心するのである。

翌朝から、新聞の就職欄に目を通しました。そして、朝日新聞の女子求人欄の「編集部員求ム」の広告に応募してパスしたのだった。

昭和二十七年五月、雄鶏社に入社し、『映画ストーリー』の編集部配属される。

私は洋画専門の映画雑誌の編集をやりながら二十二年

間の『NEVER』を一度に取り戻したのです。^喝

この言葉から不平不満を拭い去って目前の仕事に満足している精神の高揚が感じとれる。

そして昭和三十三年には、毎日新聞の今戸公德氏の勧めで、新人作家でつくっている「Zプロ」の仲間に入り、日本テレビのダイアル一〇番用シノブシス作りに加わって台本の共同執筆を始めた。三十三年の十月と三十四年の六月に『火を借した男』と『赤い爪』という二本の作品を書いている。『火を借した男』は共作だったから向田邦子の単独デビューは三十四年の『赤い爪』になる。又ふとしたことがきっかけで、ラジオのディスクジョッキーの原稿を書く仕事も始める。今まで活字の世界にいて、彼女にとって音楽は趣味だったが、この二つが一つになって飛びはねるおもしろさに三年ばかりはわき目もしないで一生懸命に打ち込んだ。そして三十四年秋頃からラジオ一本に専念し、めきめき頭角を現わすことになる。とりわけ重要なのは数人の男性ライターにまじって森繁久彌の『奥さまお手はそのまま』という番組を手掛けたことだろう。この時の高い評価が後の『森繁の重役読本』（三十七年から八年間続いた長寿番組）執筆につながり、やがて森繁出演のドラマ『七人の孫』（TBS）へと結実していくのである。やがてフリーライターとして二足のわらじをはくことになり、

昭和三十五年五月には甘糟幸子らと女性三人のフリーライター事務所「ガリーナクラブ」を開き、『週間平凡』『週間ユウロン』他でルポ・ライターをつとめるようになって雄鶏社を辞める間際には、

昼は出版社につとめ夕方からは週刊誌のルポライター、その内にラジオの原稿を書く（「ねずみ花火」）^註

という生活を送ることになった。時代はあたかも映画産業が急速に斜陽化してゆく時期にさしかかっていた。

昭和三十五年暮れ、向田邦子は九年間勤めた雄鶏社を退社した。

昭和三十七年三月からは、新たなラジオ番組『森繁の重役読本』のライターとして本格的な活動が進められた。

二年後昭和三十九年には、TBS系のテレビドラマ『七人の孫』の執筆にかかる。と同時に週刊誌の仕事からは遠ざかっていった。

『七人の孫』は明治生まれの祖父（森繁久彌）、大正生まれの父母（大坂志郎、加藤治子）、昭和生まれの七人の孫が登場する「大家族ホームドラマ」の原型である。共同執筆であったが向田邦子の出世作となった。昭和三十九年は、以後五百本近いテレビドラマを書いた脚本家・向田邦

子の記念すべき出葬の年となったわけである。

そして向田家にとつても、昭和三十九年は忘れられない年となった。明治人の父と一見派手な職業についた彼女との間にいさかいが起こり、父親の強い反対を押し切つて、遂に彼女が家を出たのである。

かくして、私生活においても一人歩きを始めた彼女は好評だった『七人の孫』に引き続き、『時間ですよ』、『じゃがいも』、『だいきんの花』、『寺内貫太郎一家』……とテレビドラマで続々とヒットを飛ばし、本格的なテレビ作家としての地位を着実に築きあげていった。

昭和四十四年二月二十一日、父・敏雄の死は突然にやってきた。急性心不全。五分と苦しませぬ、せっかちな父らしい最後であつたという。『父の詫び状』は勿論、数多くの向田作品に、父の影が色濃く投影されているのは周知の事である。あらゆる意味で大きなその存在が突然に消失した。乳癌の発病は昭和五十年十月の事である。手術の為彼女は東京女子医大病院で三週間の入院生活を送っている。早期発見ではあつたが輸血が原因で血清肝炎になり、右手が全く利かなくなるといふ後遺症に悩まされた。

雑誌『銀座百点』から初のエッセイの依頼があつたのは退院して一ヵ月しかたたぬクリスマス・イブの日だった。連載はそれから二年半続いた。この歳月が彼女にとって何

よりの薬だったが文章を書くということを感じ始めた張合いも精神安定剤の役目を果たした。『父の詫び状』という初めて書いたエッセイは、作家向田邦子を世に出したといつてもいい作品である。となると、乳癌という大病は作家・向田邦子の原点だつたと言つてもいいのかも知れない。心くばり、氣くばり、氣づかい、思いやり彼女がそう語られるのがよく分かるエピソードがある。

友人の植田いつ子氏が風邪をひいて高熱を出し、ひとり暮しのマンションで床に臥せていた時のことである。「あと十五分ぐらいたらマンションのドアをあけたいてちょうだい。あなたの食べる物投げ込んでくから」^詰という向田邦子からの短い電話が入る。

きっかり十五分後、ドアのあたりでゴソゴソと音がしたので、植田氏があわてて起きていくと、彼女の姿はすでになく、玄関の上がり框には湯気の立つ手作りの料理と封筒に入った走り書きが残されていた。

お礼の電話をかけた植田氏に、向田邦子はワザと怒つたようにこう言つた。

「別に特別じゃないんだから。放送局に原稿届ける用事があつたもんでちよつと寄つただけなのよね」^詰風邪をひいた友人に氣を使わせない心くばり、お礼を

いわれてはに candem せむるかわいらしさがうかがえる。

反面家族に対してはわがままな所もあったようだ。

深夜、弟の保雄氏を荻窪から南青山のマンションまで呼びだしておいて、到着した彼をいつもより少し長くまたせた挙句、

「申し訳ない。あれから筆が走り出したのよ、弟なんだから——」

と言いながら、右手は片手拜みで左手からはすばやく、シーバスリーガルの銀色の箱をおっつけてきた。^勝

昭和五十五年に直木賞を受賞する迄のエピソードがある。

向田邦子の学友でもあり、新潮社の校閲部長川野黎子氏に頼まれて昭和五十四年に入ってすぐに『小説新潮』の別冊に「中野のライオン」というエッセイを書いた。

その「中野のライオン」が載った雑誌が発売になり、そのライオンを飼っている人が本当にいて、その人がたまたま『小説新潮』を読み、向田邦子のところに連絡してきた。彼女は、

「私はあのように書いたけど、そういうことがあるとい

うことを全然信用していなかった。それが本当にあいう事であるのね。夢みたいだ」^註
と繰り返したという。

この出来事が向田邦子に活字に対する見方、活字に対する手ごたえを感じさせたのか、それからしばらくたって自ら小説を書くということをした。実際に連載を書く迄、書く書かないのやりとりがあったのだが、昭和五十五年の二月からようやく『小説新潮』に連載が始まった。その連載が終わらないうちに、三作目の「花の名前」四作目の「かわうそ」五作目の「犬小屋」が直木賞候補に選ばれた。

向田邦子の受賞を思う時、これ迄迎ってきた「直木賞」というものの歴史をふり返っても、その道はあまりにも険しかったと言えよう。ここで、彼女の作品の良さを審査員にアピールし、強力に推してくれる人物がいなかったら現実的に、彼女の受賞は見送られていたに違いない。

果たして向田邦子には三人もの強力な理解者がいた。山口瞳氏、水上勉氏、阿川弘之氏の三人である。山口瞳氏に至っては、

「向田邦子さんという人は、私より小説が上手です。それから随筆も私より上手です」^註

とまで言わしめている。

かくして、彼女の実力と三氏の強力な推しが実を結んで、志茂田氏との二作授賞が決定した。

テレビのドラマを書き、片手間に随筆を書いてきた五
十過ぎの女が、これまた片手間に書きはじめた短篇小説
で思いがけない賞をいただいたことは幸運であり幸福で
あろう。(「直木台風」^註)

彼女はこんなふうには、自分の仕事を「片手間」と表現し
ているし、他の所でも、スキーに行くお小遣い欲しさに始
めた台本書きがいつのまにかおもしろくなり本業になった
と書いている。

向田さんの作風が変わったのは、乳ガンの手術のあと
からであるように思う。

それまではどこか片手間を思わせるような

「悪いけど好きでたまらなくてやってる仕事じゃないわ。
お小遣いが欲しいだけなの」と、そんなつぶやきが聞こ
えて来るような仕事ぶりだったのが、突然精彩を帯びて、
何とも手強いライバルとして僕の前に立ちはだかる感じ
になつてきた(略)

亡くなる少し前、向田さんは、妹さんに向かって、

「私、ほんとは努力家なのよ」

と言ったという(「向田邦子 十三年目の遺産 巻頭特
集」^註)

その事は弟の保雄氏も認めている。

地道な努力をしない怠け者、と自分では言ってるが、
それは一種のポーズで、完全主義者には、いつだって地
道な努力がどこかにひそんでいるものである。^註

「片手間」だとか「お小遣い欲しき」を全面に出すこと
で強烈な自我と自信を隠していた。そんな往生際の悪さも
向田邦子のバネになっていたし、エエカッコシイもバネだっ
た。幾つものバネ仕掛けにはずみをつけられて向田邦子は
ものすごい量の仕事をした。

「私、ほんとは努力家なのよ」

という言葉は、自分の美意識にこだわり続けた向田邦子
がふと洩らした、休息の溜息だったのかも知れない。

昭和五十六年八月二十二日、向田邦子は台湾旅行中に還
らぬ人となつてしまった。

その最期を鷺田小彌太氏は、

完結した生なるものがあるわけではない。しかし、向

田の突然の事故死は、人生を閉じる形としては、ほほ理
想的なものに近かった、と死を聞いた時の驚きを離れて
みれば思わずにいられない。（「本と人と 1 向田邦子
の仕事」^註）

と書いている。

彼女の突然の死は、作家向田邦子がようやくこれから円
熟期に入らんとする矢先の出来事だった。

雑誌の編集記者、フリーライターとしての滑走を経て、
テレビ、ラジオのシナリオライターとなって機体は宙に浮
き上がり、人気シナリオライターとして一気に急上昇の末、
エッセイスト、小説家としての翼をも得、これから大いなる
羽ばたきにかからんとしたその途端、パッと消えてなくな
ってしまった。向田邦子の一生にはまさにそういう印象
がある。

癌に侵され、いつ果てるとも知れぬ残りの人生を思い、
ひたすらに活字の中に自らを刻印していった向田邦子の後
半生。彼女はまさに凝縮した生を生き、かけぬけていった
といえる。

第二章 作品の魅力について

第一節 記憶と思い出

向田邦子の作品の中で「記憶」や「思い出」という言葉
が使われている例を列挙してみる。

いたづら小僧に算盤で殴られて、四つ玉の形にへこん
でいた弟の頭も、母の着物に赤いしみをつけてしまった
妹の目尻も、いまは思い出のほかには、何も残っていな
いのである。（「身体髪膚」^註）

思い出はあまりに完璧なものより、多少間が抜けた人
間臭い方がなつかしい。津瀬さんの葬儀に漂っていたア
ジの開きを焼く匂いは、臨終の父の顔にのっていた豆絞
りの手拭いと共に、忘れられないものになりそうである。
（「隣の神様」^註）

子供の頃の夜の記憶につきものは、湯タンポの匂
いである（略）

湯タンポは翌朝までホカホカとあたたかかった。自分
の湯タンポを持って洗面所にゆき、祖母に栓を開けても
らい、なまぬるいそのお湯で顔を洗うのである。日向く^{ひなた}

さいような金気の匂いがした。(「子供達の夜」^註)

記憶はここでプツンと切れているのだが、どうもこのあと、この時の赤い蝦蟇口を使ったような気もするので多分水兵さんは「冗談だよ」という感じで蝦蟇口を返してくれたのだと思う。だが、私の思い出の中の絵は堤防の上をゆく、蚊トンボのようなすねをした女の子が、すれ違った水兵さんに赤い蝦蟇口をひよいとさらわれて呆然としている場面なのである。(「細長い海」^註)

釣針の「カエリ」のように楽しいだけでなく、甘い中に苦みがあり、しょっぱい涙の味がして、もう一つ生き死にかかわりのあったこのふたつの「ごはん」が、どうしても思い出にひっかかってくるのである。

(「ごはん」^註)

竹の皮に海苔巻を包む母の手許を見ながら、早く大人になってお嫁にゆき、自分で海苔巻を作って端っこを思いきり食べたいものだと思っていた。戦争激化と空襲で中断した時期もあったが、それでも小学校・女学校を通じて、遠足は十回や十五回は行っている。だが、どこへ行ってどんなことがあったか、三十数年の記憶の彼方に

霞んではっきりしない。目に浮かぶのは遠足の朝の、海苔巻作りの光景である。(「海苔巻の端っこ」^註)

思い出というものはねずみ火花のようなもので、いったん火をつけると、不意に足許で小さく火を吹き上げ、思いもかけないところへ飛んでいって爆ぜ、人をびっくりさせる。(「ねずみ火花」^註)

お正月の思い出といえば、袖の長い着物であり、新しい押し絵の羽子板であり、お年玉である。(略)

ところが、百人一首の中に一枚だけ極彩色のトラランプが混じったように、一年だけ、異国のお正月風景があるのである。(「兎と亀」^註)

人間の記憶というものはどういう仕組みになっているのだろうか。他人様のごことは知らないが、私の場合、こと食べ物に関してはダブルスになっているようだ。

しかも、私の場合カレーの匂いには必ず、父の怒声とおびえながら食べたうす暗い茶の間の記憶がダブって、一家団欒の楽しさなど、かけらも思い出さないので、それがかえって懐しさをそそのかすから思い出というもの

は始末に悪いところがある。

(「昔カレー」^註)

「裸のマヤ」というとそだけ白くなった壁面と「ハポン」の文字が云々と書いたが、これは正確でないことに気づいた。

いまブラド美術館を思い出すと壁にはちゃんと「裸のマヤ」の絵がかっている。見たはずのないあの絵を知らない間にかけてしまっている。

歳月は思い出の中に記憶をパッチワークみたいにはめこんでしまうのである。
(「白い絵」^註)

心に残る思い出の地は、訪ねるもよし、遠くにありて思うもよしである。ただ不思議なことに、帰ってくるたびに色あせて、いつの間にか昔の、記憶の中の羊羹色の写真が再びとってかわることである。思い出とは何と強情っぱりなものであろうか。

(「鹿児島感傷旅行」『眠る盃』所収)^註

長い間、開かない抽斗に閉じこめておいた古い変色した写真を取り出して、加筆修整をしなくてはならないのだが、不思議なことに、記憶というのはシャッターと同

じで、一度パシャッと焼きついてしまうと、水で洗おうとリタッチしようと変えることが出来ないのである。

(「新宿のライオン」『眠る盃』所収)^註

子供の頃の記憶というものは撮さなかった写真のようなものである。普段はどこにどう仕舞ってあるのか見当もつかないのだが、ふとしたはずみで焦点が合うと、ポラロイド・カメラのように瞬間に現像焼付がされて目の裏に一枚ずつ出してくる。(「水虫侍」『眠る盃』所収)^註

私がもう少し利発な子供だったら、あのお弁当の時間は、何よりも政治、経済、社会について、人間の不平等について学べた時間であった。残念ながら、私に残っているのは思い出と感傷である。(「お弁当」)^註

「思い出」や「記憶」という言葉が使われる例は『父の詫び状』が圧倒的に多い。それと言うのも『父の詫び状』というのは乳ガンを患った後の作品で、向田邦子自身、そのあとがきに書いているように「遺言状」のつもりで幼い頃の「思い出」をタネに書いているからであろう。こうして列挙してみると、如何に、彼女が、好んで「記憶」や「思い出」という言葉を用いたかがあきらかになる。直木

賞を受賞した作品が含まれている短編集『思い出トラップ』というタイトル名も「兎と亀」というエッセイにばらばらではあるが現れている。

向田邦子が思い出すコツのようなものというのは、数字や記述ではなく、匂いとか感触とか、温度とか、音であった。そういう感覚をまず思い起こして目をつぶると、だんだん周囲の物や人が見えてくるというのだ。そして彼女が記憶を読む職人であったもう一つの理由は、彼女が最後まで向田家の娘だったからである。彼女の母親・向田せい氏も又、主として金銭にまつわる記憶が人並みはずれていたこと、家族の顔ぶれがかなり長きにわたって同じで、しょっちゅう昔の思い出話に興じていたこと、それが記憶を中断させなかった。

そして彼女はその記憶を実に生き生きと、現在という空間に甦らせる術を心得ていた。沢木耕太郎氏は彼女を、

向田邦子は記憶を読む職人であるかのようだ。(『父の詫び状』註解説)

と述べているが、まさしく膨大な量に及ぶ「記憶」の数々は、彼女のエッセイの命であり宝であったと言っても過言ではないだろう。

第二節 父親について

向田邦子は昭和五十四年の『徹子の部屋』で次のように言っている。

「ああいう人とだけは結婚したくないと思いましたがねえ。だから私、お嫁に行けなかったんだと思うのよ」註

彼女の父親向田敏雄は、人一倍の努力家で、夜学に通いながら給仕をし、高等小学校卒業の学力で誰の引き立てもなしに会社始まって以来の昇進をした人だった。屁理屈の人であり理不尽な人間であった。出先で面白くないことがあると女関へ入るなりちよとした落度を見つけてはよくどなった。

しかし、子供に対する愛情も人一倍強い人だった。

病名が決まった日からは、父は煙草を断った。

長期入院。山と海への転地。

「華族様の娘じゃあるまいし」

親戚から陰口を利かれる程であった。

家を買うための貯金を私の医療費に使ってしまったという徹底ぶりだった。

父の禁煙は私が二百八十日ぶりに登校するまでつづい

た。
（「ごはん」^註）

これは向田邦子が小学四年の時、肺門淋巴腺炎を患った時のことである。

彼女の父親は自分の勤める会社のものを滑稽なほど大切に
にする人間だった。

向田邦子は、子供の頃、会社のマーク入りの手帖だか封筒だかを踏んだといって、したたかに突き飛ばされたという。

彼女はそこまで会社に忠誠を使わなくてもいいじゃないかと出世主義の父を内心軽蔑し、家族にまで強要する父を憎んでいた。^註

邦子が小学校六年の時、父に買ってもらったガラス製の筆立てを落として割ってしまったことがあった。

失くなっているのに気づいた父が、

「買ってやった筆立てはどうした」

と尋ねた時、彼女は軽い気持ちで、

「壊れました」

と答えた。すると彼女の父親は語気を強め、

「もう一度いってみろ」

と怒った。あっ怒られるなと彼女は思ったが同じことをば繰り返した。

次の瞬間、彼女は、あお向けに畳の上に転倒していた。いきなり平手で頬を張り飛ばされたのだ。

それから紙に「壊れた」「壊した」と書き彼女の顔につきつけると、

「どうだ、違うだろ、ハッキリしろ、これからも、ずっと、そうしろ」

と命令した。^註

カンシヤク持ちで怒るのが趣味のように怒っていた父親で、時には理不尽な怒り方もする。そんな彼を憎んだことが少なからずあった向田邦子が始めて父を許し、理解したことがある。その場面を引用する。

祖母が亡くなったのは、戦争が激しくなるすぐ前のことだから、三十五年前だろうか。私が女学校二年の時だった。

通夜の晩、突然玄関の方にざわめきが起こった。

「社長がお見えになった。」

という声があった。

祖母の棺のそばに座っていた父が、客を蹴ちらすように玄関へ飛んでいった。式台に手をつき入ってきた初老の人にお辞儀をした。

それはお辞儀というより平伏といった方がよかった。

当時すでにガソリンは統制されており、民間人は車の使用も思うにまかせなかつた。財閥系のかなり大きな会社で当時父は一介の課長に過ぎなかつたから、社長自ら通夜にみえることは予想していなかつたのだろう。それにしても、初めて見る父の姿であつた。(略)

私は亡くなつた祖母とは同じ部屋に起き伏した時期もあつたのだが、肝心の葬式の悲しみはどこかにけし飛んで、父のお辞儀の姿だけが目に残つた。私達に見せないところで、父はこの姿で戦つてきたのだ。

父だけ夜のおかずが一品多いことも、保険契約の成績が思うにまかせない締切の時期に、八つ当りの感じで飛んできた拳骨をも許そうと思つた。私は今でもこの夜の父の姿を思うと、胸の中でうずくものがある。(「お辞儀」^註)

これほど厳しくこれほど娘を愛した父がいただろうか。愛情の表し方を知らず、いや表すことを恥と心得る明治男の典型がここにあり、昭和ヒトケタの長女はその愛に十二分に答えた。^註

まさにそのとおりでと思う。幼少時代彼女を取り巻く世界の中で、その重要な位置を占めた父親像が自然浮かびあがつてくるのは言うまでもない。

結 び

彼女の作品の魅力は細部を説得力をもって描くことにあつた。ことに戦前の平均的な家庭の情景と交流の描写の中にそれがあらわれている。その細部の基本部分は、彼女個人の実体験に基づいているから説得力をもつ。

どれほどの人気番組を生み出すライターであつても、『父の詫び状』を書きえなかつたら、おそらく凝縮の時を迎えず終つたと思ひなした方がよい。(「本と人と」^註 向田邦子の仕事)

と鷲田小彌太氏は言う。

彼女は、彼女の实体験に基づいた記憶や思い出をエッセイ、特に『父の詫び状』で描くことで凝縮の時を迎えた。そのカギとなつたのは、それを書く数年前の父親の死と乳ガンの発病だつた。

はじめの一年、「癌」と「死」の字が目飛び込んだと書いたが、二年目に入ると「生」という字が心に沁みだ。(『父の詫び状』^註あとがき)

と書いているように、生か死かを迫られた時、人はもった力を最大限に發揮できるのかもしれない。

彼女の一生は五十一年と短かすぎたが、その五十一年は、彼女の作品のように張りつめた、凝縮した生だったように思う。

パッと咲いてパッと散る花火のような一生か、細く長くそうめんのような一生かという言葉に耳にしたことがあるが、彼女の場合、前者だろう。

凝縮した生、凝縮した作品、それが向田邦子の魅力だと思ふ。

註

- (1) 『向田邦子全集・第一巻』文藝春秋昭和六十二年六月刊。初出『ジュノン』昭和五十二年六月刊。
- (2) 『向田邦子全集・第二巻』文藝春秋昭和六十二年八月刊。初出『PHP増刊』昭和五十一年七月発行。
- (3) (2)に同じ。
- (4) 『父のわび状』向田邦子著。文春文庫、一九八一年十二月刊。初出『銀座百点』文藝春秋、昭和五十二年八月発行。
- (5) 『向田邦子ふたたび』文藝春秋昭和五十八年臨時増刊号。
- (6) (5)に同じ。
- (7) 『姉貴の尻尾』向田保雄著。文化出版局、昭和五十八年八月刊。
- (8) (1)に同じ。初出『別冊小説新潮』新潮社、昭和五十四年春季号。
- (9) 『実践女子大学公開市民講座シリーズ』第二集(一九八七年)実践女子大学実践女子短期大学後援会編。
- (10) (5)に同じ。

- (11) (2)に同じ。初出昭和五十五年八月二日付『毎日新聞』
- (12) 『ザ・ビッグマン』二巻四号、世界文化社、一九九一年四月発行。
- (13) (7)に同じ。
- (14) 『潮』昭和六十三年七月発行。三五一卷。
- (15) (4)に同じ。初出『銀座百点』文藝春秋、昭和五十二年五月発行。
- (16) (4)に同じ。初出『銀座百点』文藝春秋、昭和五十三年二月発行。
- (17) (4)に同じ。初出『銀座百点』文藝春秋、昭和五十二年九月発行。
- (18) (4)に同じ。初出『銀座百点』文藝春秋、昭和五十二年七月発行。
- (19) (4)に同じ。初出『銀座百点』文藝春秋、昭和五十二年四月発行。
- (20) (4)に同じ。初出『銀座百点』文藝春秋、昭和五十二年三月発行。
- (21) (4)に同じ。初出『銀座百点』文藝春秋、昭和五十二年八月発行。
- (22) (4)に同じ。初出『銀座百点』文藝春秋、昭和五十二年一月発行。
- (23) (4)に同じ。初出『銀座百点』文藝春秋、昭和五十一年四月発行。
- (24) 『霊長類ヒト科動物図鑑』向田邦子著。文春文庫、一九八四年八月刊。初出『週刊文春』文藝春秋、昭和五十五年五月〜五十六年五月発行。
- (25) (1)に同じ。初出『ミセス』昭和五十四年五月発行。
- (26) (1)に同じ。初出『別冊小説新潮』新潮社、昭和五十四年夏季号。
- (27) (1)に同じ。初出『オール讀物』文藝春秋、昭和五十四年九月発行。
- (28) 『無名仮名人名簿』向田邦子著。文春文庫、一九八三年八月刊。『週刊文春』文藝春秋、昭和五十四年五月〜昭和五十五年五月発行。
- (29) (2)に同じ。
- (30) 『オール讀物』文藝春秋、第四十四卷八号、平成元年六月一日発行。
- (31) (4)に同じ。初出『銀座百点』文藝春秋、昭和五十二年四月発行。
- (32) (28)に同じ。
- (33) (2)に同じ。初出『現代』昭和五十四年七月発行。
- (34) (4)に同じ。初出『銀座百点』文藝春秋、昭和五十二年十月発行。
- (35)に同じ。
- (36) (14)に同じ。
- (37) (4)に同じのあとがき。